

# 全国青年ボランティアセンター ニュースNO8（宮城版） 5月7日

## みんなの力が被災した人たちに勇気を 与えていると思えた——亘理町で活動して

大阪と宮城のメンバーは5月2日～4日まで宮城県亘理町のイチゴ農家のAさん夫妻のビニルハウスに浸水した津波の泥の撤去のボランティア活動をしました。

### ○「ビニルハウスを何とかしてほしい」 の声に応えて

Aさんが住む地域では地震のときに約60cmの津波が押し寄せ、地域で450棟あったイチゴのビニルハウスのうち20棟しか残りませんでした。Aさんのビニルハウスにも土砂が侵入し、家も地震で打撃をうけ住めなくなり、夫妻はイチゴを貯蓄する納屋で生活していました。「どうにも手のつけようがない」という時に、日本共産党横田有史県議を通して「Aさんのビニルハウスの泥を撤去してほしい」と全国青年ボランティアセンター仙台にボランティアの要請がきました。

### ○「希望の苗があれば栽培していける」

亘理町には宮城と大阪のメンバー約20人がボランティア活動をしました。現場に到着してビニルハウスに入ると、一面にイチゴ畑、しかも全てに泥がおおいかぶさっています。乾いて硬くなった泥はブロック状になっています。それをビール箱に入れて、外に運び出していきます。泥と元からあった土の見分けがつかず、それを少しずつすこしずつ取り除き、初日は80うねあったうち3うねしか泥を取り除くことができませんでした。「途方もなく感じてしまい意欲を失いかけた」「この作業を2人でやると、一体いつになったら終わるんだろう」という言葉が漏れます。

その後も3日、4日と同じ作業を行っていきます。だんだんメンバーも慣れてきて、楽しく作業をすすめていきました。はじめ

は、落ち込んでいたAさん夫妻も少しずつ明るくなっていきました。Aさんの奥さんがわずかに残ったイチゴの苗を指して「これは希望の苗なんです。この苗があるからイチゴを栽培していけるんです」と話すとメンバーの胸が熱くなります。

### ○「必ず復興します」

最終日の4日午後、Aさん夫妻を囲んで感想交流をしました。はじめ、Aさんはなかなか話す事ができませんでした。でも、「すごい泥の量だった。大阪に帰っても伝えていって、被災地の力になりたい」「はじめボランティアに参加するかどうかわ迷っていたけれど、参加してよかった。1人でやってもすすまないけれど、みんなの力があってよかった」「根気がある作業でちょっとしかすすまなくて申し訳ないと思う。でもまた来たいと思いました」とメンバーから口ぐちに語られました。それを聞いたAさんは涙を流しながら「みなさんありがとうございます。必ず復活します。みなさんに必ず、復興した証しを届けることを約束します」と話してくれました。

3日間Aさんのビニルハウスで作業をしたモッチャンは、「結局ビニルハウスの半分も片づける事ができなかった。でも、あんな状態のなかでも『必ず復活する』と言えるAさんはすごいと思った。僕たちの力は微力かもしれない。でも、みんなが力を合わせたら『またやろう』と被災した人に勇気を与えられるんじゃないかと思った」と話します。